The TENDAI journal
天台ジャーナル
令和7（2025）年5月1日 木曜日
（毎月1日発行）1部80円（消費税込・送料別）
発行所：天台宗出版室
発行人：出版室長　坂本　圭司
〒520-0113大津市坂本4-6-2
天台宗務庁内　電話：077-579-0022(代)
Eメール：t-press@tendai.or.jp
広報天台

増加する寺院の侵入盗被害

防犯研修会で意識向上　―群馬教区―

群馬教区（三浦祐俊宗務所長）は4月17日、教区内寺院において頻発している侵入盗被害を憂慮し、教区宗務所において緊急の「防犯研修会」を開催した。警察官や実際に被害にあった住職の講話などを通し、70名の参加者が防犯意識の向上に努めた。

同研修会は、教区内寺院の安全・安心に資することを目的に、被害状況の共有・防犯意識の向上・具体的な防犯対策等を学習するために開催した。近年、寺社を狙った窃盗は増加傾向にあり、警察庁が発表した２０２２年に発生した神社仏閣の刑法犯件数は5千を超えている。また群馬教区が実施したアンケート調査では、32カ寺が被害にあったという結果が出た。これらの現状から、2月中旬から研修会開催に向けて準備を開始。多方面から招いた講師の話に参加者らは熱心に耳を傾けた。

研修会開催にあたり三浦宗務所長は、「令和3年頃から寺院を狙った侵入盗事件が始まり、近年では巧妙な手口も増えている。私たちは、お預かりしている寺院の財産、そして寺族を守るためにも、防犯意識を一層高め、寺院の防犯対策を強化してまいりたい」と挨拶した。

研修会前半では、高崎警察署生活安全課、宗務副所長、教区議会議長による講義が行われた。

生活安全課署員は、過去の侵入盗事犯の情報をもとに、狙われやすい寺院の特徴や、犯人が嫌がる効果的な防犯対策等を紹介。もし犯人と対峙してしまった場合には、何よりも人命を最優先するよう強調した。

続いて眞木興空宗務副所長が、研修会開催に先立って実施された「教区被害状況調査」の結果を報告。教区内の一割を超える寺院が侵入盗被害にあっていることや、被害の多くに共通する侵入手段、発生時刻等が報告された。

また実際に侵入被害にあった林祐進教区議会議長（南前橋部光琳寺住職）からは、被害当時の具体的な様子が報告された。併せて部内複数寺院で同時多発的に発生した侵入盗事案を受け、ＬＩＮＥグループ等による早期の情報共有と、教区宗務所への被害報告の必要性が語られた。

研修会後半では、天台宗災害補償制度の村上憲一郎氏から、盗難被害補償に関する説明、並びに民間警備会社２社による、デモンストレーションを含む具体的な防犯警備システムの紹介も行われた。

多岐にわたる講義内容により同研修会は、参加者各位が自坊の安全に向けて多くの情報を得る有意義なものとなった。

（報告＝大沢亮智通信員）

極微（ごくみ）

「天災は忘れた頃にやってくる」とは物理学者の寺田寅彦のよく知られている言葉だが、大災害が起きた時には、しばしば引用される警句だ。被災から時が経ち人間の持つ時間感覚と自然界の何千年、何万年単位を中心とした天災の起きるサイクルとの大きなズレに警告を発しているのだろう▼人間にとって長い時間単位は何十年といったところだが、自然界にとっては何十年、何百年はほんの一瞬に過ぎない。たとえ数十年という長さでも、災害は引き続いて関連するひとまとめのものと考えるべき時間もあるのだ。大災害といっても数十年も経てば忘れ去られ易い▼だから再三云われるのは、常に「災害の実態を伝承していく」ことの大切さである。近頃、災害を経験していない子どもたちが、被災者に体験を聞き次代に伝えていく試みが少しずつ増えていると聞く。大事な試みであると思う▼あの東日本大震災から、まだ十数年しか経っていないのに、被災体験の生々しい印象が忘れ去られ、風化しつつあるように感じられる。物事の移り変わりが激しく、次から次へと新しい体験がやってくる現代社会だから、無理もないことだろう▼しかし、「天災は忘れた頃にやってくる」という警句を「忘れない」ためには、被災体験を次代に伝えていくことが、何をおいても大切なことだ。